

神奈川県立鎌倉支援学校における学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催した。

審議会等名称	令和6年度 神奈川県立鎌倉支援学校第1回運営協議会		
開催日時	令和6年 6月20日(木) 午前9時30分～午前11時00分		
開催場所	会議室		
出席者	委員：7名 事務局：6名		
次回開催予定日	令和6年10月24日(木)		
問合せ先	神奈川県立鎌倉支援学校 副校長 望月 好子 電話番号 0467-45-1951 ファックス番号 0467-43-4804		
下欄に掲載するもの	議事録	議事概要とした理由	
審議(会議)経過	<p>1 学校長挨拶</p> <p>2 令和6～9年度学校のミッションとグランドデザインについて</p> <p>○ 学校長より</p> <p>資料2のアンダーラインは昨年度から追加・変更部分。「共生社会の実現に向け」を一番上にし、「児童・生徒一人ひとりの夢や希望の実現に向けて」を新たに追加。就労支援を充実させたい。目指す子ども像は教員の声も取り入れている。1の健康についてはWHOの提言にもある。4については社会生活を送るうえで重要である。目指す教職員像について1. 人権…学校生活は一生に一度限りの経験、その後の人生に大きく影響する。児童・生徒そのものと意思を受け止め支えていく。2は子ども像の2、なりたい自分と連動。3、神奈川県では共生社会を目指しインクルを進めている。県教委・市教委・関谷小と協働していく。大きな期待を寄せられているが、県の方針を踏まえて今できることとの意味付けを行いながら着手していく。4健康とワークライフバランスを大切に。教職員にも夢と希望、やりがいをもってほしい。働き方改革の中に多様な勤務形態があり、それを含みながら学校運営を行っていく。単に効率化ばかりでなく、意欲も伸ばして人材育成を行う。</p> <p>【質疑応答】</p> <p>Aさん：「たくましく生きる」が力強く感じる。保護者も「力を合わせるぞ」という気持ちになる。目指す子ども像の2も良い。自己肯定感を大切にしていってほしい。周りから認められている経験が他者への思いやりにつながる。</p> <p>Bさん：共生社会の実現に向け、学校もずいぶん変わってきているが、それを地域の人が知らない現状がある。もっとアピールできるとよい。</p> <p>校長：教育課程をオープンにするということは、地域をフィールドにして教育活動を行うということにつながる。広報活動に力を入れていく。まずはご近所を大切に、ターゲットを考え発信する。コロナ禍から取り戻していく。</p> <p>会長：卒業後も見据えた教育活動にしていく。</p> <p>Cさん：障害の状態に応じたではなく、以前は、障害は個人に原因した医学的な</p>		

ものとしていたが、ICFでは、障害とは社会と本人の摩擦としている。どうしても指導とかの意識を持ちやすいがそれだけでは不具合が残る。周りの環境を整える意識も持つ。意思決定の具体的な内容は？

会長：指導か支援かといった難しい視点もあるが、これからも取り組んでいく大事な視点だ。

校長：ICFは大きな転換であった。地域に学びを還元、社会にどう参加していくかが重要。現場実習は地域と学びを作り上げていく一つである。地域と距離感を近づける。

会長：日本においてはインクルーシブ教育を特別支援教育というシステムの中で、その人にふさわしい教育を行っているのだといえる。その内容をもっとインクルーシブ教育に近づけていくことで国連も理解する。

校長：共生社会にむけて明確な答えはないが、小学校と隣接している県内でもめずらしい環境を生かしコツコツとやっていく。

3 4年間の学校目標について（副校長より）

【質疑応答】

Dさん：企業では働ける人が本当にいない。県（高校）はインクルに流れている。重度の生徒は企業就労に目がいらず、就労移行や福祉を考えている。学校のセンター的機能を発揮し、地域の学校とも協力し、「なりたい自分」の情報を出してほしい。本人・保護者がいろいろな情報に触れてほしい。

Cさん：放課後等デイサービスの対応がバラバラ。

校長：顔の見える対話と相談が大切。

Aさん：鎌倉支援からセンター的機能、理学療法士に来校していただき、専門的な機能等について発見があった。今後も具体的な道具等教えてもらいたい。本校でもコミュニティ・スクールが始まった。地域と話し合い具体的なことを考えていきたい。

Eさん：企業就労はハードルが高く諦めていた。情報を知りたい。子どもはもっと勉強したいと言っているが、進学先がほとんどない。効果的なICTの活用を進めてほしい。初期設定状態。

校長：ICT環境については、昨年度から一人一台を持つようになった。しかし、ネットワーク環境や不正アクセスの防止等環境整備に県全体で取り組んでいるところである。時間がかかっているが、これからスタートしていく。

Eさん：就労にもICT活用ができるとうい。

Cさん：防災については、要支援者の個別避難計画を作成していきたいが、計画だけでも仕方がない。ご近所が重要。重度の方こそ地域とつながっていない。

切れ目ない支援部会については、進路指導は今から学んでいかないと。卒後にどう生活するかわからない人が多い。計画相談だけでは済まない。そもそも相談員不足。発達障害の子どもは不適切な関りで適応障害や強度行動障害等2次障害を引き起こす。適切な支援をお願いしたい。普通級での発達障

害がある児童についてはセンター的機能を発揮してほしい。能力があるのでもったいない。支援学校教育とセンター的機能を連動させいろいろな情報をキャッチしていけたらよい。

B さん：同じような能力でも社会性を身に付けることで卒業後が大きく変わってくる。

4 令和6年度学校目標について（副校長より）

【質疑応答】

D さん：3の具体的な方策①進路学習会をどう生かしたか。一人ひとりの就労支援に結び付けて。ただ学習会をやりましたにならないように。

C さん：1の意思決定について。②どれくらい子どもが身に付けたか。実践して終わりにならないように。

会 長：学習会や研修会の成果が教員の指導に反映されているといった形で連動する必要がある。

B さん：ワークショップに参加し、いろいろな人材がいることを知った。学校がどんな人材を必要としているかわからない。顔みしりがいればすぐにつながる。「こんな人材いますか？」と学校から言ってもらえば紹介できる。（例：横浜薬科大の方、地域に協力したいが、どうすれば…）何ができるかわからないけど、知り合いになっていけばスムーズ。

5 令和6年度学部・グループ目標について（副校長より）

【質疑応答】

会 長：学部・グループの課題解決の取り組みが、具体的に「何が」「どこまで」「どのように」できたのかが明らかとなるような形で伝わるのが大切。

C さん：表出だけでなく、受け止められる経験が成長につながる。

6 まとめ

会 長：短い時間の中で身のあるご意見をいただき、参考になった。本日いただいたご意見を今後の学校運営に生かしていきたい。